持続可能性日本語教育
—生活の質を向上させる言葉の力—

岡崎眸（お茶の水女子大学）

１．はじめに

持続可能性日本語教育では、グローバル化の変動の下で生きる人々が、どのような環境の下でどのように自身の生活を組み立てているか（特にライフコースに関わる選択をどのように行っているか）を知ることを通して、次の三つのことを達成することを目指す。

① 自分の生活が、世界のコト、モノ、人のつながりと、どのように関わっているか、どのようにつながっているかを、自分を起点（出発点）として理解する。

② そのようなつながりの中に編み込まれている自分は、どのように生きたらよいか、例えばライフコースに関わる選択をどのように行えばよいか、その際、他の人とのつながりを自分はどのように持ちたいか、考える。

③ 以上をもとにして、自分とは何か、について考え、自分なりの持続可能な生き方を追求する。

以下では、まず、何故、持続可能性日本語教育として日本語教育を構想するのか、グローバル化という社会の急激な変化と関連付けながら、その背景を述べる。次に、どのような日本語教育として展開されるか、その全体像を教室活動の具体例も含めながら述べる。最後にこの教育の今後の展望を示す。

２．何故、持続可能性日本語教育か、その社会的背景

持続可能性日本語教育が必要とされる社会的背景として、ここでは、①グローバル化の進行と②それへの対抗軸としてのパラダイムの転換の二点取り上げるである。この順番にみていく。

2.1　グローバル化の進行

人間の諸活動は、社会によって規定され（=作られ）同時に社会を作る（＝規定する）という二つの側面を持っている。社会のありように対して、私たちは無力であり何もできないと思いがちであるが、私達の日々の言動の積み重ねにより社会が作られている点も見逃せない。このことを踏まえた上で、グローバル化の進行に伴い、私達を取り巻く世界がどのように再構成され、どのようなことが議論されてきたか、次の四点から考える。

⑴ 急激な社会変動
⑵ 困難な世代間教育
⑶ 即戦力養成に偏った教育
⑷ 持続不可能な社会

⑴　急激な社会変動

グローバル化の進行により世界のコト、モノ、人の繋がりはかつてないほど密接になった。ソ連邦の消滅と中国における市場経済の導入により世界はいわば一つの巨大市場となり、その市場の住人として、自由に競争することを社会の原理とみなす考え方が広がった。

企業は国際競争に勝つために、人件費の削減を至上命題とし、雇用の流動化を前提とするようになった。例えば、日本においても、日本企業の特徴とも言われた＜終身雇用＞が崩壊し、労働者派遣法の法制化による派遣労働の広がりの中で、有期雇用が急激に増加した。現在、日本の若者世代の 3 分の 1 が有期雇用の非正規労働者だといわれている。

他方、昨年秋のアメリカ発の金融危機の影響を受け、自動車や家電などの輸出産業を中心に企業業績が急速に悪化し、トヨタやソニーなどの大企業を筆頭に多くの企業が非正規労働者の雇い止め、解雇を始めた。この春までの失業者が非正規労働者を中心に 12 万人を越えることが見込まれている。失業率も 5.5%まで上昇することが予測され、こうした雇用情勢の急激な悪化はこれまで日本社会が経験したことのない異常事態であるという。

このような事態は、日本社会だけでなく、どこの国でも程度の差はあるにしても共通して見られている。企業などに雇用されることで生活の資を得る都市在住の勤労者にとって、こうした雇用情勢の悪化は脅威であり、生涯にわたって安定した収入が得られる生活を想定することが難しくなっている。世界のどこで暮らす、どんな人にとっても、＜安定したライフコース＞は望めず、先を見通すことが難しい社会に私たちは生きている。

しかし、このような不安定さは都市勤労者にとどまらず地方の農民でも状況は同じである。貿易の自由化･資本の自由化が進み、多国籍企業による大規模農業が世界の隅々にまで拡大した。小規模農家は競争に敗れ土地を失い、都市流民となったり、外国への出稼ぎ者となったりしている。例えば、今回のシンポジウムが持たれたルーマニアでも、土地を失った農民が子どもをおいてスペインなど海外に手稼ぎにいくケースが後を絶たず、社会問題化しているという。

(2)　困難な世代間教育

このような急激な社会変動の中で、世代間ギャップは歴史上類例をみないほど大きくなった。有史以来どの社会においても、旧世代と新世代の間にはギャップが存在した。世代間ギャップの存在しない社会など歴史上なかったということもできよう。しかし、現在進行中のグローバル化によって引き起こされている世代間ギャップはそれらとは質的に異なるものであると考える。つまり、全世界を巻き込んだ「徹底した競争」や「規制の全面緩和」がこれほどまでに重視された時代はかつてなかったのではなかろうか。「適度の競争」や「一定の規制」を重視する社会に育った親世代の価値観を、それらの否定の上に成り立とうとしている現代のグローバル化社会に生きる子ども世代は、そのまま継承することで自分たちの生活を組み立てることはできない。先日タイからの留学生が次のようなことを語っていた。

> 私は一人っ子であり、自分の進路について親身になって助言してくれる人がいない。父は中学しか卒業しておらず、母は高校 1 年までは行ったがお金が続かず中退した。父母に進路のことを相談すると、自分たちにはアドバイスする力がないから自分で好きなようにしなさいといわれるだけであった。父母は、学校はでていなくても、私より長く生きているのだから、アドバイスができると思う。でも、父母はできないという。それがさびしい。

この留学生のように親に相談したくても親がその役割を果たせないケースは多い。言い換えれば、親世代は子ども世代にロールモデルを示すことができない。子ども世代は自らの手でグローバル化社会をどう生きるか、生き方のモデルを創っていかなければならない

のである。

こうした新たな生き方のモデルを創るという課題は、地球規模で増えている移民の子ども世代において最も顕著な形であらわれる。同時に、そうした移民を迎え入れる側においても課題となるであろう。とはいえ、新たな生き方のモデルという場合、その軸は＜移民する側－移民を受け入れる側＞などのような一つの軸ではなく、実に様々な軸をもって考えなければならない。例えば、ルーマニアのように社会主義体制から資本主義体制に転換したことに関わる軸、あるいは、ルーマニアの農村地帯のような海外への出稼ぎ者を多く抱える社会に住む人々にとっては、海外出稼ぎに関わる軸も一つの軸となって加わるであろう。

(3)　即戦力養成に偏った教育

それでは、こうした新たな生き方のモデルを創るという若者世代が直面している課題は教育においてはどのように取り組まれているのだろうか。一言で言うと、グローバル化の進行に合わせて進められてきた教育改革では、国際競争力がキーワードとなった「即戦力養成」が教育の根幹に据えられるようになった。

教育の使命は、社会の要請に応え、社会が必要とする人材を養成することにあるといわれる。このような教育の使命を受けて、社会に出て直ぐ使える知識･技術をもった即戦力の養成を重視する教育への転換が図られてきた。大学などの高等教育機関を例にとってみると、従来は、教養豊かな人間性を涵養しその上に専門性を備えた人材の養成が重視され、教養教育と専門教育はいわば高等教育の二つの柱として位置づけられていた。しかし、この間大々的に進められてきた「教育改革」の結果、教養教育は実学志向の語学教育に切り縮められて専門教育中心となり、その専門教育では専門化･細分化されたカリキュラムが一般化してきた。同時に、在学中から企業に馴染むことを目標にインターンシップが奨励され多くの大学で単位化されている。また、就職活動の開始時期も早まった。大学の 3 年次には就職先が決まり、卒業するまでの間、就職先の企業から資格取得の課題を与えられたり、研修会への参加を義務付けられたりすることもめずらしくない。

大学教育を受けても、世界がどうなっているのか、私はその中でどう生きていくのか、などについて学ぶことは難しい。急激に変動する社会をどのように見、その中でどのように生きていくか、新たな生き方のモデルを創るという課題は大学教育の中でも取り上げられていないというのが日本の高等教育の現状である。

（４）持続不可能な社会

＜全世界を一つの市場とする自由競争＞では、人間の欲望を限りなく刺激し、大量生産・大量消費の循環を際限なく繰り返すことが社会の原理となる。例えば、モノの開発においても、人間生活にとってどれほど必要かが吟味されるのではなく、どれほど企業としての利益を上げられるかが優先される。その結果、地球環境のますますの悪化に加え、一方における暖衣飽食と他方における飢餓人口の拡大という現実を生み出している。もはや持続不可能な社会とも言うべき状態になっている。

2･2　パラダイムの転換：持続可能性への着目と追求

こうしたいわば旧来のパラダイムに対して、持続可能性への着目とその追求を特徴とする新たなパラダイムが登場した。以下では社会のあり方と言語・言語教育のあり方の二つの点からこのパラダイムの転換を考える。

(1)　社会のあり方に関わるパラダイムの転換

＜自然環境の破壊から自然環境の保全へ＞及び＜モノの開発から人間の開発へ＞という二点からこの転換を捉えることができる。この転換の背後には、自然の見方における転換がある。つまり、自然を人間活動のために利用し克服するものという捉え方から、人間は自然の一部であり、互いに繋がっているものだという捉え方への転換である。人間のありようをよりよいものにしたいのなら、その人間が生存する自然環境もまたよりよい状態にあらねばならない。

また、化石燃料に端的に示されているように、石油にしても鉄鉱石にしても、モノは開発され消費されればそれでなくなり、その意味では有限である。他方、人間の能力は開発されればされるほどに向上し、力を発揮する（人間開発の詳細については、国際連合開発計画による『人間開発報告書』参照のこと）。その意味では無限である。潜在能力が十分開発されることなく一生を終える人がこの地球上には如何に多いことか。これは、何も南の国々だけのことではなく、北に属する国々でもみられる事態である。特に先に見たように、増え続けている非正規労働者はいわば使い捨て状況におかれ、職業上の能力開発が殆どなされていないことが多い。社会が持続可能になるためには、従来のモノの開発に換えて人間の開発によるべきことが国連をはじめてとして様々のところで指摘されるようになった。

そして、重要なことは、この人間開発には言語の保全が不可欠であるということである。つまり、言語の保全なしには人間開発は不可能である。次節で詳しく検討する。

(2)　言語と言語教育のあり方におけるパラダイムの転換

<u>言語の保全と人間活動の保全</u>

こうした社会のあり方におけるパラダイムの転換は、言語の捉え方にも影響を及ぼし、「言語の保全」という考え方が生まれた。言語の保全は、その言語を使ってなされる人間の諸活動の保全なしには不可能である。したがって、これまでの言語の捉え方（＝言語を言語話者･人間活動から分離する）も見直されなければならない。言語の保全と言語話者・人間活動の保全を一体のものと捉える言語生態学の考え方が注目されるようになった。この場合、「保全」ということばの持つ意味に注目したい。保全**とは**単なる保存や保持ではない。言語や人間諸活動のあり方が機能しなくなっている（＝機能不全）状態にあるとしたら、それを機能する状態･あり方にもっていくという積極的で動的な意味を持つ。

具体例で考えてみよう。ひと時代前の買い物と比べると、現代の買い物では、言語はそれほど必要とされていない。コンビニエンスストアでは、一言も言葉を発さなくても買い物は可能である。このことに見られるように、現代では他人と言葉を交わさずとも生活ができるように環境が整ってきている。職場でも言語を使わない場面が多くなっている。例えば、様々な形で競争が激しくなっている毎日の生活に追われ、自分達の生活が不安定になっているという不安はあっても、その不安を他の人と共有し、どう打開したらよいか、問題はどこにあるのかを、話し合って、共に改善を図るという機会は減っている。このことは、言語が人々の問題解決のために活用されていない、つまり機能していないことを意味する。言い換えれば、ことばによるコミュニケーションによって人間活動（生活）の改善をはかることができていないのである。このように、言語の状態の悪さが人間活動（生活）の状態の悪さに結びついている。

他方、持続可能性日本語教育の中心的な活動である「対話的問題提起学習」という活動では、活動中使われる言語の状態･あり方、人間･人間活動（参加者･参加者の営む活動）のあり方・状態はどうだろうか。対話的問題提起学習においては、家庭や職場などで各自が直面している不安や問題を参加者が互いに提起し合い、語り合い、解決の糸口を一緒に探ることが追求される。不安や問題が自分だけのものではないことに気づき、あるいは、不安や問題の原因が究明され、場合によっては、解決の方策が講じられることもある。ここでは、問題の共有･解決の方策を探る手段として言語がその機能を十分果たしていることから、言語が保全されているといえる。同時に、参加者にとっては、不安や問題を前向きに捉えそれに共に対応しようとする活動が実践され、そのようなものとして人間関係が構築されていることから、人間生活が保全される展望が開かれているということができる。

＜持続可能性追求を内容＞とする、新たな言語教育

－持続可能性教育の開発の必要性：持続可能な生き方を探ること自体を目標とする教育カリキュラムへの要請－

このような背景の中で、人間諸活動の一つとしてなされる第二言語教育においても新たな言語教育のあり方が追求されるようになった。その一つが持続可能性言語教育である。先に見たように、学問自体の高度化･専門化と競争に勝つための即戦力養成という社会的要請の下に、高等教育では、カリキュラムの専門化・細分化が進み、その分教養教育は後退した。他方、自分が生きる世界がどうなっているかを知り、そこで自分はどのように生きていくかを考え、新たな生き方のモデルを創造する、つまり、持続可能な生き方を追求するという学習は、専門化･細分化されたカリキュラムではなく、カリキュラムを横断して（アクロス・カリキュラム）初めて可能となる。ここに言語教育が登場する根拠がある。つまり、人間活動と言語を一体のものと捉える見方、すなわち、人間活動が言語によって支えられている側面に注目するなら、このような学習を提供する場としては言語教育が最適だといえるのではないだろうか。

この場合の言語は第一言語、第二言語を問わない。情報を集め、それを基に議論を作り、考えるという学習を達成するには、高度な言語能力が必要となる。この点からは、第一言語教育がより適当だといえるかもしれない。他方、第二言語教育を通してはじめて可能となることもある。例えば、ルーマニアの日本語教室を想像してみよう。ルーマニア人日本語学習者が、中国人日本語学習者が日本語で書いたテキスト（その人の生活の状況とその下でのその人の生き方に関する文章）を読み、日本語でそれについて仲間と対話をし、また対話後に自分の意見を日本語で書くという日本語学習である。ルーマニア人は中国人日本語学習者が書いたテキストを日本語で読むことで、他では入手できない同輩中国人の生の声を知ることができる。この点は、自分が生きている世界を知るために、極めて重要である。

バイアスのかからない情報はない。特にマスメディアが提供する二次的情報は強いバイアスがかかっている。対して、同時代を生きる他国の日本語学習者が書いたテキストは一次的情報であり生の声である。その声に耳を傾け、仲間と対話を繰り返すことで、私達は世界のコト、モノ、人とのつながりの実態についてよりよく理解することができるであろう。同時に自分のこれまでの生き方のある一定の傾向に気づき、さらに、これからの自分の生きかたを探るに当たって、他者の生き方を参考にすることができ、その意味で、自分

なりの持続可能な生き方の追求ができるであろう。

以上を背景として提起されたのが持続可能性日本語教育をその一つとする持続可能性言語教育である。次節では、この教育はどのような日本語教育として展開されるか、その全体像を概観する。

３．持続可能性日本語教育：持続可能な生き方を探ることを目標とする第二言語教育

＜どのように学ぶか＞と＜何を学ぶか＞とは本来は別々に考えることが求められる。他方、両者が相互に規定しあい、コインの裏表のような関係にあるという側面もある。例えば、要素に細分化された言語形式を学ぶ内容とする場合には、説明とドリルで文型を積み上げるという方法が妥当であろう。コミュニケーションを学ぶ内容とする場合には、説明やドリルではなく、実際に言語を使ってやり取りをすることで目的を達成するタスクが多用されるであろう。この二つを厳密に分けて考えることは難しい。そこで、ここでは一先ず、持続可能性日本語教育の全体像を次の二つの点から考えることにする。

① 何をどのように学ぶか

② そこで教師はどのような役割を果たすか

3.1　何を、どのように、学ぶか：持続可能性日本語教育の教室活動

持続可能性日本語教育の教室活動は、学習者が、自分から出発して、他者に広げ、そこからさらに自分に戻るという認識のサイクルを作ることに主眼がおかれる。グローバル化の変動の下にある自国･自国の人、私自身について知ることを起点とし、それを他国･他国の人、クラスの仲間について知ることへと拡張し、拡張した視座から再度自分を捉え返す。その過程で、学習者と教師は、共に、考え、語り、聞き、読み、書くことを通じて言語の4技能＋考える力を発動し、その伸張が目指される。活動の具体例を以下に挙げる。

次の三つの活動で一つのユニットが作られる。学習は、学習者が自分の周囲を取材してテキストを作成し、そのテキストを使ってクラスの仲間と対話を行い、最後に、生き方をめぐって設定されている四つの問い（後述）に答えるという流れになる。

活動のユニット

(1)学習者参画によるテキスト作成

↓

(2)テキストベースの活動(対話的問題提起学習、ロールレタリング)

↓

(3)四つの問いに答える活動

以下では、(1)からの(3)の活動について紹介する。

(1) 学習者参画によるテキスト作成：

グローバル化の変動の下にある自国･自国の人、私自身について知るために、身近な情報ソースから情報を集め、身近な人々から聞き取りをし、それらをもとに日本語によるテキスト作成を行う。

① 母語の新聞や書籍などから、例えば雇用や食糧などをキーワードにして、自国の情報を収集する。その情報をもとに、日本語で調査結果をまとめる
キーワードによる調査のまとめ（例は稿末注１）

② 自国の同世代人を相手に、母語を使って、その人のライフコースに関わる選択（進路選択や就職など）を中心とするライフストーリーについて聞き取りをする。聞き取りをした内容をまとめて日本語でテキストを書く
自国の他者のライフストーリーテキスト（例は稿末注２）

③ 自分自身のライフストーリーを日本語で書く
自身のライフストーリーテキスト（例は稿末注３）

この学習者自身によるテキスト作成という活動から分るように、持続可能性日本語教育では、日本語学習がテキストを作成することから始まる点に注目したい。一般的な日本語学習では、市販の教材や教師が作成したテキストを理解することから学習が始まるからである。つまり、学習対象が学習者の身近なところから学習者自身の手で選択される。

どのような学習へのアプローチが想定されているかを検討する。そのために、まず、これらの活動をもう少し詳細にみてみよう。①のキーワードによる調査のまとめの作成では、後続するクラスの仲間との活動のためのテキスト作成を目的に、非正規労働、金融の自由化、若者の雇用状況などのキーワードを切り口に、自国の新聞や本を読み、そこから情報を得、その情報をまとめて日本語のテキストにする活動である。②の自国の他者のライフストーリーテキスト作成とは、後続するクラスの仲間との活動のためのテキスト作成を目的に、自国の友人や知人、親戚に、これまでの生活の中で直面したライフコースをめぐる意思決定に関わるエピソードを母語で聞き取り、それをもとに自国の人々のライフストーリーとして日本語で書くという活動である。③の自身のライフストーリーテキスト作成とは、後続するクラスの仲間との活動のためのテキスト作成を目的に、自分がこれまで遭遇した様々なライフコース上の意思決定場面を振り返り、そこから自分のライフストーリーを日本語でテキストにする活動である。

これらの活動には幾つかの共通点がある。第一に、母語を使って得た情報を日本語にするという形で学習が進む点である。母語は第二言語習得を干渉するとして二つの言語を別々に捉えようとする考え方が教育現場には依然として根強く残っている。しかし、近年母語は第二言語習得を促進するための有力な資源となることが指摘されるようになった(Cummins 1984)。習得の干渉や妨害ではなく、むしろ習得を促進する資源となるという考え方である。

キーワードをもとに母語で情報を調べ、それを日本語にするという活動を例にとると、母語で調べる段階では「考えること」に重点がおかれ、日本語にする段階では「言葉」に重点がおかれていることが分る。つまり、考えることと言葉の学習が平行して進められ、言葉を学ぶ必然性が学習者にとって納得できる形がとられているといえる。また、持続可能性日本語教育のように、生き方の模索を学習の内容とする場合には「考えること」が教室活動の中心におかれ、その点でも母語は外せない。

第二に、テキスト作成という活動がテキストができれば活動はそれで完了というのではなく、次の活動で使用されるテキストの作成というように位置づけられ、次のテキストベ

ース活動に学習が継続している点が挙げられる。言い換えれば、何のために、誰に向って、テキストを書くのか、が学習者に明示的に与えられているといえる。このことは、学習者の作文の限界として指摘されることの多い「読み手が意識されていない」問題への一つの回答になると考える。学習者には、例えば、自国の友人や知人に母語で聞き取りをし、その結果をライフストーリーにまとめるとき、クラスの仲間の疑問や質問、関心などを予測しながら、それに一つひとつ応えることを考えながら、日本語で書くことが求められている。

(2) テキストベースの活動：

学習者参画により作成されたテキストを読み教材とする二つの活動（対話的問題提起学習・ロールレタリング）がチェーンをなして繋がっていく。これらの活動を通して、グローバル化の変動の下にある自国、自国の人々、私自身、そしてその外に繋がっている世界の変動との関わりを考えることが追求される。

① 対話的問題提起学習（例は稿末注４）：学習者同士がペアになって、学習者参画による　　テキストを使って、対話を積み重ねる。

② ロールレタリング（例は稿末注５）：テキストの主人公に対して、この主人公の状況や生き方について、自分が感じたこと（質問･助言・共感・批判・賞賛など）を内容として手紙を書く。続いて、その手紙をもらった人（テキストの主人公）になりきって、手紙を読んだときの状況をできるだけ詳細に思い浮かべながら、返信を書く。

(3) 四つの問いに答える活動：

ユニットのまとめの活動として位置づけられる。四つの問いとは以下の四点である。

① 自分を出発点として理解した「世界のコト、モノ、人のつながり」

世界をどう認識するか

② どのように生きるか。どんな基準で、どんな選択をするか。

行動基準をどこにおくか

③ 他者と**どのように関わるか。他者と**どのような繋がりをもつか。

自分と他者の関係をどうもつか

④ 私とは何か。上の三つの問いに対する自分の答えから分る自分とはどんな人間か。

自分とはどんな人間であるか

各ユニットの活動が終わった段階で、その活動の結果、いわば自分なりの到達点を明確にするために、これら四つの問いに対する答えをまとめる活動を行う。ポストイトを使ってキーワードマップを作り、そのマップの中に「私」の位置を記入する方法もある（（例は稿末注６）。あるいは問いの一つ一つについて文章にする方法もある（例は稿末注７）。そして、作成したキーワードマップや文章は、テキストとしてクラスで仲間と対話をしたり、担当教員との間での対話のツールとしたり、あるいは自身のポートフォリオとするなど多様な学習に使うことができる。

(3)　まとめ

持続可能性日本語教育が日本語教育として構想される背景として、急速な社会変動とそれに対応しきれない即戦力養成に偏った教育を指摘し、オールタナティブとして、言語と人間活動を一体のものと捉える言語観とアクロス･カリキュラムという言語の特質を踏まえて、言語教育を世界認識とそこでの持続可能な生き方を獲得する場とすることを提案し

た。紹介してきた＜テキストの作成、作成したテキストを使った対話的問題提起学習やロールレタリング、四つの問いに答える＞という一連の活動は次の二つの点から特長づけることができる。

●変動する社会をどう生きるか、自分なりの持続可能な生き方の追求とその方法

●言語･人間活動の保全･育成、

四つの問いに答えることでその時点、時点での自分なりの生き方を明確にすることを通して自身を一貫した存在とすることを目指す一連の活動（テキストの作成、作成したテキストを使った対話的問題提起学習･ロールレタリング･四つの問いに答える）からみえる重要な点は、二つある。一つは言語が重要な役割を果たしていることである。例えば、世界認識は、学習者自身でテキストを書く、あるいは他者の作成したテキストを使って対話的問題提起学習による対話を仲間との間で進める、という幾つもの多様な言語活動を通してはじめて形作られ獲得される認識である。専門家の学説を読んでいわば鵜呑みにする形で手に入れた単なる知識とは違うものということができる。したがって、言語は、他者との間で新たな知識を生成する重要なツールとしての役割をよく果たしていることが分る。言語が、本来、他者とのやり取りを通して新たな知識を生成するという学びの道具であることを考えると、このことは、こうした言語の本来の機能が十全に果たされていることを示している。言い換えれば、言語は保全されている。

それでは、人間活動の方はどうであろうか。学習者は、テキストを書き、テキストを対象として仲間との間で対話を進め、その結果を統合しながら、自分なりの世界認識を獲得し、その世界の中に自分を位置づけ、自分が何者であるかを確認するという言語活動に参加している。世界、自分、他者及びテキストに示された他者の生き方を知ることで、自身の生き方の選択の幅は確実に広がり、持続可能な生き方の基盤が形成される。これは、とりもなおさず、言語活動という人間活動が実に生き生きと展開されていることを示しているといえるのではないだろうか。

他方、このようにいわばスムーズに一連の活動が展開するのには教師の支えが不可欠である。

3.2　教師はどのような役割を果たすか:学習者の学習の同行者としての教師

先に述べた「グローバル化し変動する社会に生きるものとして、世界を知り、自分なりの持続可能な生き方を探る」という課題は学習者だけのものではない。教師もまた一人の人間としてこの同じ課題に直面している。したがって、持続可能性教育に携わるとき、**教師は、学習者と基本的に同じ立場**に立っている。その意味で、教師は、**学習者の学習の同行者**である。学習者と共に歩み、共に考えることが要求される。

同時に、教師は、共に考えるための＜素材･考える道筋の選択肢＞を用意するという役割も併せ持つ。教師は、学習を支え導かなければならない。学習者は言うまでも無く多様である。生き方など考えたくない、社会に出て直ぐ役に立つ即戦力をつけて欲しい！と希望する学習者は少なくない。特に物心ついて以来ずっと試験、試験できたので、今更仲間と本音で語ることはできない、嫌だ、仲間は競争相手でしかない、という学習者がいるかもしれない。また、限られた情報だけで自分の生き方を決め、他の選択肢には関心の向かない学習者や、どうせ、私達は××だ！という運命論･宿命論の落とし穴にはまり込み、

考えても仕方がない！とばかりに、思考停止状態にある学習者も少なくないであろう。このような考えることに消極的になりがちな学習者を激励し、持続可能な生き方を共に追求する学習を実現するためには、教師は、そのための知識や技術をもたなければならない。しかし、その知識や技術は、自らも教師としての持続可能な生き方を探る中ではじめて獲得できるものであると考える。例えば以下のような問い（Bartlett 1990 から一部抜粋）を、教師である自分に問いかけてみる。

① 自分が第二言語教師になりたいと思った理由は何だったのだろうか？
② それらの理由は今でも自分に当てはまるのだろうか？
③ 第二言語教師としての私を支えている考え方は、どのような歴史的･社会的な規定を受けてできているものだろうか？
④ この考え方をこれからも持ち続けたいと思っているのだろうか。思っているとしら、それは何故だろう？
⑤ この考え方は社会のどのような人々にとって役に立っているのだろうか。

こうした問いを軸に自分の教育実践を内省することで、持続可能な生き方を探る学習の同行者として必要な知識や技術が獲得される。

４．今後の展望

持続可能性日本語教育は、学習者の学習環境に応じて様々の方法をとって実施される。カリキュラム上では、複合シラバスの一つとして位置づけ、他の構造シラバスや機能シラバスなどと組み合わせて用いることもできる。あるいは、単元と単元の間やコースの終わりなどにスポット的に実施したり、逆に課外のプロジェクトワークとしてコースを通して実施することなども可能であろう。

ここでは、特に、孤立環境下という言語環境と学習者の言語レベルに注目して、今後の展望を述べる。

4.1　孤立環境下における日本語教育

ルーマニアを初めとするヨーロッパの日本語教育は、特に日系企業などへの就職の道（＝ツールとして日本語を学ぶ道）も少ないことから、ツールとしての日本語学習とはなりにくい。平たく言えば、日本語ができても就職などに有利に働く可能性は低い。じゃ何故日本語を学ぶのだろうか。

学習動機を聞くと、よく取り上げられるのは、道具的動機ではなく、「未知の言語への挑戦」や「漫画などのサブカルチャーを楽しむ」などである。「未知の言語への挑戦」や「漫画などのサブカルチャーを楽しむ」などからは、ルーマニアの日本語学習者が、日本語学習を、学習者自身の人間としての活動を豊かにするものとして捉えていることが推察される。そして、この点は極めて重要であると考える。何故なら、生活の質を向上させるものとして日本語という言葉の力を捉えていると考えられるからである。このライン上に、持続可能性日本語教育も位置づけることができよう。つまり、世界を知り、自分なりの持続可能な生き方を探る教育の場の一つとしての日本語教育である。

4.2　中上級の日本語教育

特に海外の日本語教育を語るとき、初級レベルの学習に限定して論じられることが多い。中級では、初級で学習した文型の組み合わせや語彙を増やすことが主に目指され、上級に

なると、新聞や文学などの学習が中心になり、中上級者に特化した教授法の開発は遅れているといえる。勿論この背景には、英語などと比べて日本語という言語の言語活力の小ささもあって、中上級学習者の絶対数が少ないこともあろう。しかし、海外でも中上級レベルの学習者を増やしていきたいというのが日本語教育に関わる私達の希望である。そのような中上級学習者向けに特化した日本語教育として、本稿で取り上げてきた持続可能性日本語教育は位置づけられると考える。しかし、更なる緻密化は今後の課題である。

4.3　ネットワークの構築

グローバル化し、変動する社会の中で、自分なりの持続可能な生き方を探るためには、世界の様々な地域で人々がどのように生活を組み立てているかを知ることが不可欠である。そのために、学習者作成の日本語テキストを国や地域を越えて共有することが望まれる。テキストの共有だけでなく、テキストを使ってなされた対話的問題提起学習の対話の記録や考察、ロールレタリングなども共有できれば、私達の世界を見る視座はさらに豊かになり、持続可能な生き方が可能になると考える。言い換えれば、私達の生活の質を向上させるものとして言語の力が再認識され、言語の保全と私達の人間活動の保全において着実な一歩を踏み出すことになる。

注

１．キーワードによる調査のまとめの例

『インドネシアにおける雇用』をキーワードに、インドネシア人日本語学習者が行った調査のまとめ

職場に入った女性は非常に増加してきている。2006 年 2 月から 2007 年 2 月では貿易部門や農業部門で女性の人が 200 万増加し、男性にとってはただ 28 万人であった。失業者は 2007 年 2 月ジャワ島が最も高く、ほぼ 10.39%で第二にスラウェシ島で 9.94%、第三にスマトラ島で 9.62%と指示された。会社の試用期間 6 ヶ月から 1 年間まで認めてと要求されている。終わってから新しい契約が更新されている。試用期間が終わってから 2 つの選択があり、正社員になるか解雇される。解雇されたら、会社謝礼をもらえない。正社員になったら解雇謝礼をもらえるということだ。

この前（「以前」の意味)、公務員は若者にとって理想的な仕事ではない。しかし若者の価値観はそれについてますます変わってきた。公務員になるために厳しい競争を突破しなければならない。公務員という仕事を選ぶ理由には、「安定な生活を保ちたいから」、「定年まで働く」といった理由がある。最近は公務員に人気があるようになった。

２．自国の他者のライフストーリーテキストの例

中国人日本語学習者が母国の友人Ａさんに聞き取りをしてテキストにしたもの（今回のシンポジウムのワークショップで使用したテキストの一つ）

A さんは中学校を卒業して、経理専門学校に通っていた。大学に進学しなくても、せめて何かの技能を持っていれば、卒業後は地元で何とかして就職できる

だろうと思った。しかし、現実はそんなに甘くなかった。専門学校を卒業した97年頃に、将来のことを考えると、やはり安定した就職を保障してくれる国営企業で働きたいという願望が強かった。しかし、知りようもなかったが、その頃は中国では国営企業の内部で民営化への制度改革が知らず知らずのうちに始めていた（日本語そのまま）。とにかく、安定した職につきたいから、一家総動員でコネを頼ってある国営のホテルで就職することができた。最初は仕事が忙しくて大変だったが、就職ができた安堵感に包まれた日だった。安定した仕事を持っているから、親がずっと心配してくれた縁談の話もうまくいくようになった。新婚生活が始まった早々、就職してから4年目のある日、突然「今後会社は個人営業になるので、皆さんに一定の退職金を払うから、新しい仕事を探してください」と言われてきた。結局、4 万元の退職金が安定した生活を終わらせた（日本語そのまま）。将来の生活に対する憧れが不安に変わった。失業状態で毎日家にいるようになった。よりによってそんな時に、妊娠していることが分かった。夫は仕事をしているし、支給されたお金もあるからと思って、子どもを産むことにした。忙しい仕事から開放されたが、決して気は軽くならなかった。子どもの養育費もあるし、夫一人の給料ではだんだん家計を支えていけなくなる。子どもを親に預かって、アルバイトをし始めた。月500から600元程度の給料だった。その後、バイトが2回も変わった。今20代後半の自分はこれからもバイトで生活費を稼ぐか、それとも小さい商売でもいいから、自分で何かをやるかと迷っている。子どもの笑顔は今の最高の慰めだ。

３．自身のライフストーリーテキストの例

韓国人学習者がアジア通貨危機のときの経験をもとに書いた自身のライフストーリー

1999年7月に韓国の某ホテルに予約コーディネーターとして就職した。ソウルの街で続々とできた海外チェーンホテルに比べ、そのホテルは私の両親の世代からよく知られていた有名なホテルだった。私が就職した当時の韓国は、1997年経済危機（この事件を韓国人たちは通称IMFと呼ぶ）という混乱を経験し、就職難については言うまでもなくリストラ（韓国では名誉退職と呼ぶ）という言葉が日々聞こえてきた時だった。当時私はその深刻さについてよく分からぬまま、とりあえず自分の希望通りホテルに就職ができた。それから一年たって、一緒に入社した同期の半分は会社を辞め、再就職した。就職難だったのもあって、人が辞めてもすぐ採用ができたため、人手が足りないことはなかった。会社側が「来る者は拒まず、去る者は追わず」という考え方を持っているかのように、いくら人が辞めても困った件はなかった。その一方で、役員のリストラや上司の部署移動は頻繁に行われ、リストラの危機に迫られた幹部たちは会社を辞めていった。今日の上司は昨日の上司と違うし、私が新入社員の時に運転手付の会社の車に乗っていた理事がリストラされた後に、地下鉄乗り場で誰かに目をかけられたことが聞こえてきた。しかし私はこのような状況に驚きもせず、だんだん鈍感になっていた。ただ組織というものに対して、私は

どういう存在なのかについて考えていた。偉いと思っていた理事がいなくなっても、会社は何も変わらずうまくやっていくのに、私一人この会社からいなくなっても、私がやっている仕事なんて誰でもできるし…。このようなことを考えていた。そして一体組織というものは誰によって動かされているのかが疑問だった。それは目に見えない何かもっと大きい組織があるように思われた。また会社という大きい組織の前で自分ができることは何一つもないように思われた。

会社をやめて日本に留学してきた私にも、会社および社会という目に見えない組織の前で「私は何か」という問いについての解答はない。しかし今ここで私が分かったことがある。それはその回答には関心がないということである。私の関心は、今ここで私に何ができるのかである。また家族や友達など私にとって大事な人たちが大変な時に何ができるのかに関心がある。身近な人たちにとって私ができることをやることが、社会の中にいる私ができる唯一のことであると思う。

４．対話的問題提起学習

穆紅･楊峻（2008)から引用しながら以下紹介する。

【活動のねらい】

グローバル化の変動の下にある自国、自国の人、私自身について知り、考え、語り、聞き、読み、書くことを通じて４技能、考える能力を発動しながら、学習者が各自および同世代の人々について考え、学んでいく場を形作っていくことをねらいとする。

【活動の手順】

１）自分を起点にテキストを読む。つまり、自分が主人公になったつもりで、その人のおかれた現実を想像しながらテキストを読んでいく。その時に、書かれた内容について感じた疑問をメモする。(例えば、「どうしてこの人はこのようにしたのか」、「私だったら、こうするかもしれない」など)

２）ペアでお互いに感じた疑問を話し合う。その時、適宜メモをとる。

３）ペアで話し合った結果に基づいて考察を書く。自分たちがどういう考え方をもっているかを明らかにし、あわせて違いや共通点を浮き彫りにする。

穆紅･楊峻（2008：１）

以下の対話は、上の注２に示した＜中国人日本語学習者が母国の友人Ａさんに聞き取りをしてまとめたテキスト＞を使って、中国人日本語学習者である李さんと陳さんがペアで行った対話的問題提起学習中のものである。ただし、この対話的問題提起学習における学習者同士の対話の様相を分り易く示せるように、ここでは、対話の記録の一部を抜粋して紹介する（穆紅･楊峻 2008：2-4)。

＜対話１：テキストを読んだ後の対話＞

李：読み終わった？**疑問に思うところあった？**

陳：**彼女はどうして大学に行かなかったのかな**、もし大学に行っていたら、

失業しなかったかもしれないのに。
李：あ、そうですか？(驚き)　私は特に大学に行かなかったことに対して違和感はなかった。**どうして大学に行かないことを陳さんは不思議に思ったのだろう**？
陳：その時代、私の周りの人たちは**みんな大学に入りたい**と思っていた。大学を卒業したら、**いい仕事が見つかる**し。
李：そうですか？(驚き)　**私の周り**では、大学に入った人は少なくて、中学校のときに同じ学年に 200 人ぐらいいたけど、その中で高校に入ったのは 50 人もいなかった。**ほとんどの人が専門学校**に入った。専門学校を卒業したら仕事が見つかるから。私の出身地は国の石油基地があり、国営企業が多いから、みんなは専門学校が終わったら、そこに就職できるの。
陳：おお～、そうですか？（驚き）私の周りの人は(専門学校などではなく)普通高校に入ろうとしていたけど。
（中略）
陳：**次に何かあった？**
李：私は、**国営企業で働きたいという彼女の気持ちはよく理解できる**の。
陳：あ、そうですか？私は**あまり理解できない**。彼女は将来をどのように考えているのだろう？将来は、国営企業で働きたいだけなのだろうか？
李:ああ、ここ、彼女の将来に対する期待について、私は理解できるかも。私の周りの友達はみんな安定した生活を希望しており、国営企業に入りたいと思っていた。
陳：そうですか？(驚き)　私の周りの友達はみんな将来に対する期待がかなり高くて、例えば、お金を儲けたいとか。だから、誰も国営企業なんかに行きたくないの。国営企業に入ったとしても、すぐ辞めて外資系の企業に入るとかすると思う。
李：ああ、そうなんだ。本当に違うんだね。たぶん、私の出身地にある石油企業は大きいし、ちょっと特別なのかな～。他の地域の大学に行って勉強しても、卒業したら必ず地元に戻ってきて国営企業に入った友達もかなり多い。
陳：**私達のこの違いは、同じ中国出身でも、出身地域が違うから**かな～。
李:そうかも。**じゃあ、次のポイントは何だろう**？
陳：彼女は失業したのに、**どうして子どもを産む**ことにしたのだろう？
李：(笑) あはは、絶対この点を指摘すると思ってたよ。
陳：(笑) 私のことをよく分かっているね。**私だったら、絶対産まない**。
李:え！そうですか？(驚き)　既に妊娠しているのに。産まないの？おろすの？
陳:たぶん中絶すると思う。
李:ああ、**それはない**でしょう？(驚き)
陳：じゃあ、**あなただったら、どうする**の？
李: A さんは失業中なのだから、私だったら子どもをつくる計画はしないと思うけど。でも、もし妊娠してしまったら、**私はたぶん産む**と思う。

陳：ええっ、うそでしょ！
李:既に妊娠してしまっているのに。どうしておろすことなんかできるの？
陳：子どもを産んだなら、親は、その**子どもに対して責任**を持たないといけないと思うから。
李：そうですか？その**「責任」って何を指しているの**ですか？
陳：もし、子どもを産んだら、親は、その子に良い環境を提供しなければならないと思う。もし、**親が良い環境を提供**できなかったら、その子は一生悪い影響を受けてしまうでしょう。子どもに苦労をさせたくないから、私はたぶん産まないと思う。
李:あ、そうですか(驚き)　私も親は子どもに対して責任を持たないといけないと思うけど。でも、**私が考える「責任」は、少し違う**。私はその子どもに対して良い環境を提供できないとしても、でも親として自分のベストを尽くせば、**自分の最善を尽くして育てる**ことができれば、それでいいと思う。
陳：ああ！私達の考えは本当に違うんだね。びっくりした。
李:本当に違うね！お互いのことをよく知っていると思っていたから、こんなに違うとは思わなかった。

対話２：考察を書くために行った対話

李：まとめると、どんな点をとりあげたっけ？
陳：まず、「大学か、専門学校か」、それから「国営企業か、外資系企業か」そして「子どもを生むか、おろすか」の三点
李:考察をどう書こうか～。
陳:「大学･専門学校」と「国営企業･外資系企業」をめぐる**違いは、出身地域の違いによるもの**といえるのかな～。
李:生活環境の違いね。
陳：じゃあ、**「子どもを生むか、おろすか」の違いは何による**んだろう？私達の性格の違い？
李：、うんんん、なんか違うみたい。
陳：価値観の違い？
李、：うんんん、どうだろう。
陳:李ちゃんが、自分のベストを尽くすのが、子どもに対する親の責任だと言ったのは、結構李ちゃんらしい意見だと思う。自分の気持ちにうそをついていない、結構**正直**。でも、**私は、自分にうそをついている**感じがする。
李:ええ！　そうですか。
陳:実は、私は子どもを産まないと言ったけれど、まったく迷いがないというわけではないの。生まない決心をすることは、気持ちの上ではかなり苦しいけど、でも**将来のことを考えると、やっぱりそうするしかない**と思ってしまう。
李:ああ、やっぱり。陳ちゃんは、かなり**客観的に問題を見てい**るのね、結構冷静なんだよね。

陳:他の人から見ると、冷静で、客観的なように見えるけど、でも、**自分の気持ちを犠牲にする部分もある**と思う。自分はかなり残酷だと思うときもある。
李:ああ、なんか、陳ちゃんの場合は、一人の自分がいて心の中でこう思っているけど、もう一人の自分が外に立っていて、どうすれば今後もっとよいかを考えている。つまり、陳ちゃんは、外の自分の考えによって最終的に判断を下しているのね。自分の外に立って自分を見ている。自分を他の人と比べて必ず他の人を超えたいと思う人が多いけど、でも、陳ちゃんは違う。陳ちゃんは、他の人と自分を比べるのではなく、自分の将来を考えてどうすればいいかを考えているんだよね。
陳:でも、実は苦しいときもある、自分の気持ちを犠牲にているから。実は、あなたのことを私は羨ましく思うときもあるの。あなたは、自分に正直だから。
李:私は何らかの問題があるときには、自分の気持ちに従って問題に立ち向かい結論を出すことにしているの。でも結論を出した後で、苦しくなるときもある。実は、対話をしていて「自分のベストを尽くす。それでいいのだ。」と言葉にして言ったとき、その言葉に自分でもびっくりした。というのは、**他のことでも自分は同じように考えて行動をしている気がしたから**。例えば、留学や大学院に入ることを決めたときなど。どれも自分のやりたいことだから、やろうと決めた。そのように決めた後は、自分の目標を実現したいとは思うけど、でも、自分の最善の努力を尽くすことが出来れば、思い通りの結果が得られなくても、私は納得すると思う。
陳:ああ、そうなんだ。ほんとうに、私は李ちゃんとは違う。私は自分が勉強したくて大学院に入ったわけではなく、勉強しなければならないと考えたから入ったの。なんか、自分は自分にうそをついているみたい。そのことが実は結構苦しくて、自分に納得させるまでかなり時間かかった。
李:ああ、そうだったんだ。ほら昔好きだった人とのことも、そうだったんじゃない?その人を選ばなかったよね。
陳:ああ、そうだよね。彼のことが大好きだったけど。でも一緒になれないことを考えると、やっぱり諦めた方がいいと思い、諦めた。でも、李ちゃんなら、この人のことが好きだと思ったらその人と一緒にいるんじゃない?反対にその人が好きじゃなかったら、一緒にいない。絶対に自分にうそをつかないし、
李:そうだね。考えてみると、**これまで、私たちは、一つの考え方に基づいて様々のことを判断し決めてきた**んだね。
陳:本当だね。でも、一つの考えって、何だろう?生き方?
李:そう、そう、生き方だね。**私たちの生き方は違っていて**、どっちがよいかどっちが悪いかと言うことはできないんだけど、どっちでも苦しいときがあるし、でもお互いのよいところが見えてきて、お互いにお互いを参考にできるね。これこそ、持続可能的な生き方じゃない?
陳、李:(笑)、そうだ、そうだ。

以下は二人が書いた考察である。

【考察】

李と陳は某大学の大学院の同じゼミに所属し、普段から一緒に勉強したり、遊んだり、話し合ったりする親しい友人関係にある。今回の活動では、二人は持続可能な生き方を追求する対話的問題提起学習という活動に参加し、お互いの生き方における意外な一面を発見することができた。

二人はテキストを読んで**特に陳が疑問に感じた A さんの３つの選択をめぐって対話**を行った。李はＡの選択に対してどれも疑問を感じることはなく、理解を示していた。

① Ａさんは**何故専門学校**に行ったのか。（＝**私だったら、大学に進学**する。）

② Ａ さんは**何故国営企業などに就職**したのか。（＝**私だったら、外資系**に就職する。）

③ Ａ さんは失業中であるにも拘わらず**何故子どもを産んだ**のか。（＝**私だったら中絶**する。）

①と②については、テキストを読んだ後の対話で、二人はすぐに**自分達が育ってきた環境の違い**に影響され、その結果、進学と就職について違う考え方を持っているのだということに考えが一致した。

③については長い時間かけて話し合った。テキストを読んだ後の対話で、**「失業中に子どもを産むか、産まないか」という点で二人の意見が分かれているのはどうしてか**と考えを進め、その結果、最終的に、**二人は「子どもに対する責任感」の捉え方が違う**ことに気づいた。しかし、**この違いがどこから生まれてきたものか**については、１回目の対話では考えることができなかった。

次に考察を書く段階の対話では、二人はお互いの過去の恋愛や来日など自分たちのライフコースに関わって下した意思決定を引きあいに出しながら話を進めていった。恋愛や進学などで**何らかの決断をしなければならないとき、自分はどのようにして結論を出したか**を、**「子どもの問題」と結び付けて考えた**結果、「子どもの問題だけに留まらず、ライフコースに関わる重要な事項について決断を下さなければならないとき、二人はそれぞれ通低する、**ある考え･基準をもっており**、それに基づいて選択してきたのだということ、そして、二人の選択の基準は対照的である」ことに気づいた。これらのライフコースにおける出来事に対する決断は、人生の生き方に影響してくることから、「二人の生き方が違う」という結論にたどり着いた。

二人の対話がこのように展開していき、最終的に自分達の生き方に気づき、その生き方が二人の間で違いのあることに気づくことができた。言い換えれば、二人はそれぞれ自分がどういう生き方をする人間なのか、知ることができ、同時に、相手がどういう生き方をよしとする人間なのかについても理解することができた。そして、二人の生き方が対照的であったことから、それぞれ自分とは違う生き方のあることを知ることができ、そのことで自分の生き方を拡張する可能性を獲得したと考えられる。

このような気づきが得られたことについては、以下のことと関連があるのではないだろうか。

まず、二人は親しい友人関係にあること。二人は普段からいろいろな話をしている。お互いのことをよく知っており、信頼関係も築かれている。このような関係の下で、二人はそれぞれ自分の気持ちに真剣に向き合い、思っている疑問を素直に相手に投げ出すことができた。そして、お互いのことをよく知っていることから、話し合いの中で、相手のこれまでの経験を今回の問題と結び付け、全体としてのつながりを見つけることが追求された。その結果、お互いの生き方の特徴が浮き彫りになったのではないだろうか。

次に、二人は自分を起点としてテキストを読んでいたことである。テキストで言及されていることを解釈するに際して、自分とは関係のない他人のこととして捉えるのではなく、テキストの主人公の置かれている状況を想像しながらその主人公になったつもりで自分のこととして捉えて考えようとした。これによって、活動が単なる互いの意見の言いあいで平行線のまま終わらなかったと考える。テキストを読みながら、どうしてこのようなことになったのか、自分ならそのような場合どうするか、どうしてそうするかというように、他人の問題を自分自身の問題として切実に捉えようとすることによって、はじめて、お互いの考えが交差し、結果考えが深められたのではないだろうか。

第三に、選んだテキストの内容である。このテキストは中国人の女性が遭遇した問題を取り上げたものである。二人とも同じ中国人の同世代の女性であるため、主人公の置かれている状況を自分にも馴染みでより近いものとして感じられ、自分の問題として捉えやすかったと思われる。また、このテキストで取り上げられた内容は、中国人女性Ａさんが遭遇した「進学、就職、失業、子育て」など人生の生き方にかかわるライフコースにおける出来事であるために、中国人である二人は、それぞれ自分と結びつけて生き方について考えることができたことが推測される。

二人の学習者は、テキストの主人公が遭遇した問題を自分自身の問題として考えることから出発し、対話の中で、今回テキストを読んで考えた問題を自分の今までの経験と結びつけて考えた結果、これまでの自分の人生の生き方にかかわるライフコースにおける出来事において、自分が一貫した考えを持って決断し歩んできたということに気づいた。話し合いを進める中で、自分の気づきを相手のそれと対照することで、自分のことがよくわかり、また相手のこともより深く知ることができた。お互いの生き方について見直し、考え方の広がりを持つことができた。したがって、今回の教室活動は学習者に生き方を考える場を提供してくれたといえる。

５．ロールレタリング

ロールレタリングとは、相手として設定した人に宛てて、話しかけるつもりで、手紙形式で文章を書く活動である。相手として取り上げるのはテキストの主人公である。４で示した対話的問題提起学習で使用されたテキストの場合は、Ａさんが相手であり、Ａさんに向けて書くこととなる。長さは自由。内容は、相手の人の状況に対する、共感や自分なりに感ずること、自分だったらどんなことを感じたか、どんなことが迷ったか、何を基準に「選択」したか、自分だったらどこをどうしたかなどについて書く。また尋ねたいこと「何々することを考えなかったのか」、「なぜ」、

「いつ」、「どのように」など。

続いて、ロールを換えて、今度は、手紙を書いた相手の人（Aさん）になったつもりで、手紙に返信を書く。この返信の際には、特に相手の状況を具体的細部までイメージしながらその人にできるだけ近づいた感じ方、考え方を自分の中に再現して行う。その人の起床時、就寝時までの様子、季節、気分、体調など自分がその場に置かれたらどう感じるか、どうしたかなどをイメージしながら書く。

これらを通して自分以外で自分と同じような現在の変動の下での状況に生きている他の人も様々な状況を自分のものとして考え、あるいは他者の気持ちや感じ方、考え方を理解しようとして考え、そうすることも含めて持続可能な生き方とはそれぞれの状況に応じてどのような形で考えられるのかを、一つずつ辿っていくことが目指されている。

上の注４で示した対話的問題提起学習に引き続いて行われたロールレタリングを同じく穆紅･楊峻（2008)から抜粋して以下紹介する。

陳洋によるロールレタリング

梅梅さんへの手紙（テキストに登場したＡさんを梅梅と命名して、手紙を書いている）

梅ちゃん：

お久しぶりです。お元気ですか。最近、いろいろあったと聞いていますが、大丈夫でしょうか。

「計画は永遠に変化に追いつかないものだ」という言葉の通りに、社会の変化は本当に速いですね。国営企業が民営化されることは誰も予想できませんでした。うちの大学でも似たようなことが起きています。2 年くらい前までは、まだ修士号があれば、大学に入れましたが、最近は博士号を持つことが就職の絶対条件になりました。ですから、梅梅のいまの心境が私にはよく分かります。これは、経済が著しく成長している中国のいまの時代に生まれた我々の哀しさでしょうか。我々は社会の変化をコントロールすることはできないのだから、平常心でこれらの変化に応じていきましょう。

愚痴とゆううつは問題の解決になりません。いまは、よく考えることが大切だと思います。自分は一体どんな人間なのか、どんなことをしたいのか、どんな仕事が自分に向いていて、そして自分も納得できるのかを、じっくり考えたほうがよいです。見当がついたら、その方向へ向かって頑張りましょう。もちろん、梅梅の場合は、自分だけではなく、子どものことを考えなければならないと思います。一般の人よりもっと大変かもしれませんが、自分が選んだ道なので、辛抱強く歩むしかありません。朗らかで、頑張っている母親の姿は、きっと子どもにポジティブな影響をもたらすでしょう。自分のために、子どものために、ぜひぜひ頑張ってください。

そうでした。梅梅は専門学校で経理を習いましたよね。いま、たくさんの会社が計理士が必要としていると聞いています。計理士の場合、経験が長ければ長いほど人気があるそうです。特技を一つ持っていれば、仕事が必ず見つかると思います。習った専門を生かして、計理士の資格を取ってはいかがでしょうか。計理士の資格を持つと、きっと安定した仕事を見つけられると思います。

では、また連絡をしますね。幸運をお祈りします。

陳　洋

8月7日

梅梅さんから陳洋への返信

洋ちゃん：

手紙が届きました。私のことを心配してくれて、どうもありがとう。

最近、これからどうすればいいかをずっと迷っています。国営企業に就職して、一生安定した生活を手に入れられたと思いましたが、それは大間違いでした。国営企業の仕事を失ったことは、本当にショックでした。特に、家族全員が私の就職のために奔走してもらったあげくに、今のような結果になってしまったので、私は、家族に心から申し訳なく思っています。私はもう将来に期待なんかは持てません。いまの苦境を抜け出すことに精一杯です。

でも、ご助言をどうもありがとう。自分でも経理の出身であることを忘れるところでした（笑)。最初は、小さい商売をしようと思っていたが、しかし、資金が足りなくて借金をしなければなりません。また、商売を本当に始められたとしても、うまく行くかどうかも分かりません。私はやはり固定した収入のある仕事がほしい。最近、子どもの世話をするばかりで、世間から離れてしまい、「浦島花子」になってしまいました。提案してくれた計理士のことは真剣に考えたいと思います。卒業して以来、専門に全然触れていないですが、子どものために、家庭のために、試してみます。

そちらは、最近いかがですか。勉強はうまく進んでいますか。時間があったら、また連絡をくださいね。

梅梅

8月7日

李恵によるロールレタリング

丹丹さんへの手紙（「丹丹」はテキストの主人公 A さんのことであり、ここでは従姉妹という設定である。「雪ちゃん」は「丹丹」の子どもである。）

丹丹へ

この前会ってから、また半年過ぎてしまったね。元気にしている？雪ちゃんは相変わらずよく泣くの？

仕事を失った大変な時期に雪ちゃんを産んで、将来の生活に対してきっと不安がいっぱいあるでしょう。私も日本で、生活や勉強などのプレッシャーがあってつらいときもあるけど、そういうときには「人生って山あり谷あり、苦楽の繰り返しのプロセスで、誰でも経験するものだし。つらいことを経験するからこそ、私たちは成長できるのだ」と思う。丹丹なら、絶対今の状況を乗り越えられると思うよ！

今まだ毎日バイトしているのかな。雪ちゃんは日々大きくなってきて、バイトだけで生計を立てていくのは難しいかもね。学歴重視の今の社会では、専門学校と言

っても財務のこともわかるし仕事の経験もあるから、まだチャンスがあるかもしれない。試しに仕事探しに行ってみてはどう？高い給料を望まなくていいし、仕事のチャンスをもらえればいいとして、頑張ってみたほうがいいね。万が一就職がどうしてもうまくいかなかったら、バイトをしながら夜の時間を利用して財務などの勉強をした後、また仕事を探してもいいかもしれないね。商売でもやろうと思っているとおばさんから聞いたけど、商売には元金が必要だしリスクが大きいから、今の状況を考えるとちょっと難しいかも～。慎重に考えてね。

雪ちゃんは、もうすぐ一歳になるね。時間経つのが本当に速い！丹丹は今精一杯で頑張っているので、雪ちゃんが大きくなったらきっとお母さんのことを誇りに思うよ。また何かあったら手紙ちょうだい。ずっと応援しているよ！

李恵

丹丹さんからの返信

恵ちゃんへ

手紙もらってうれしかったよ！いろいろ励ましてくれてありがとう。恵ちゃんもあまり無理せずに体に気をつけてね。

正直に言って、仕事を失ったばかりのときに突然のショックでどうしたらいいかわからなかった。その上、雪ちゃんを妊娠してしまって本当に戸惑った。今の状況を考えると、子どもを生む良い時期ではないと思ったけど、小さい命を殺すことも心苦しくて、家族みんな応援してくれて支えてくれたお陰で、やっと生もうと決心したの。ちょっと大変だけど、今の状況に向き合って頑張れば、きっとちょっとずつ改善できるだろうと思う。

あ、そうそう、いいお知らせがあるよ。私、仕事が見つかったの！財務の仕事ではなく事務補佐で月給 800 元だけど、やっぱりうれしかったよ！この何ヶ月毎日仕事探しに行っていて、財務を募集する会社は多かったけど、専門学校と聞くとまったく相手にされなかった。それで事務の仕事も探し始めて、幸いなことに先月設立したばかりの小さい会社が採用してくれて、今月もう仕事が始まったよ。今毎日昼間仕事で、夜雪ちゃんの面倒見ていてちょっと大変だけど、毎日充実している。子どもが少し大きくなって余裕が出てきたら、また財務など他の勉強をして就職の幅を広げようと思っているよ。

いろいろなアドバイス本当にありがとう！励まされたよ。恵ちゃんも勉強頑張ってね！今度中国に帰ってきたらまた会おうね。

丹丹

A さんのテキストを使って対話的問題提起学習とロールレタリングをした陳さんと李さんは次のようにこの学習の意義をまとめている（同じく穆紅･楊峻 2008 から抜粋）。

【活動の意義】

世の中が急激に変動している中、親世代の人生経験は子ども世代に適用する

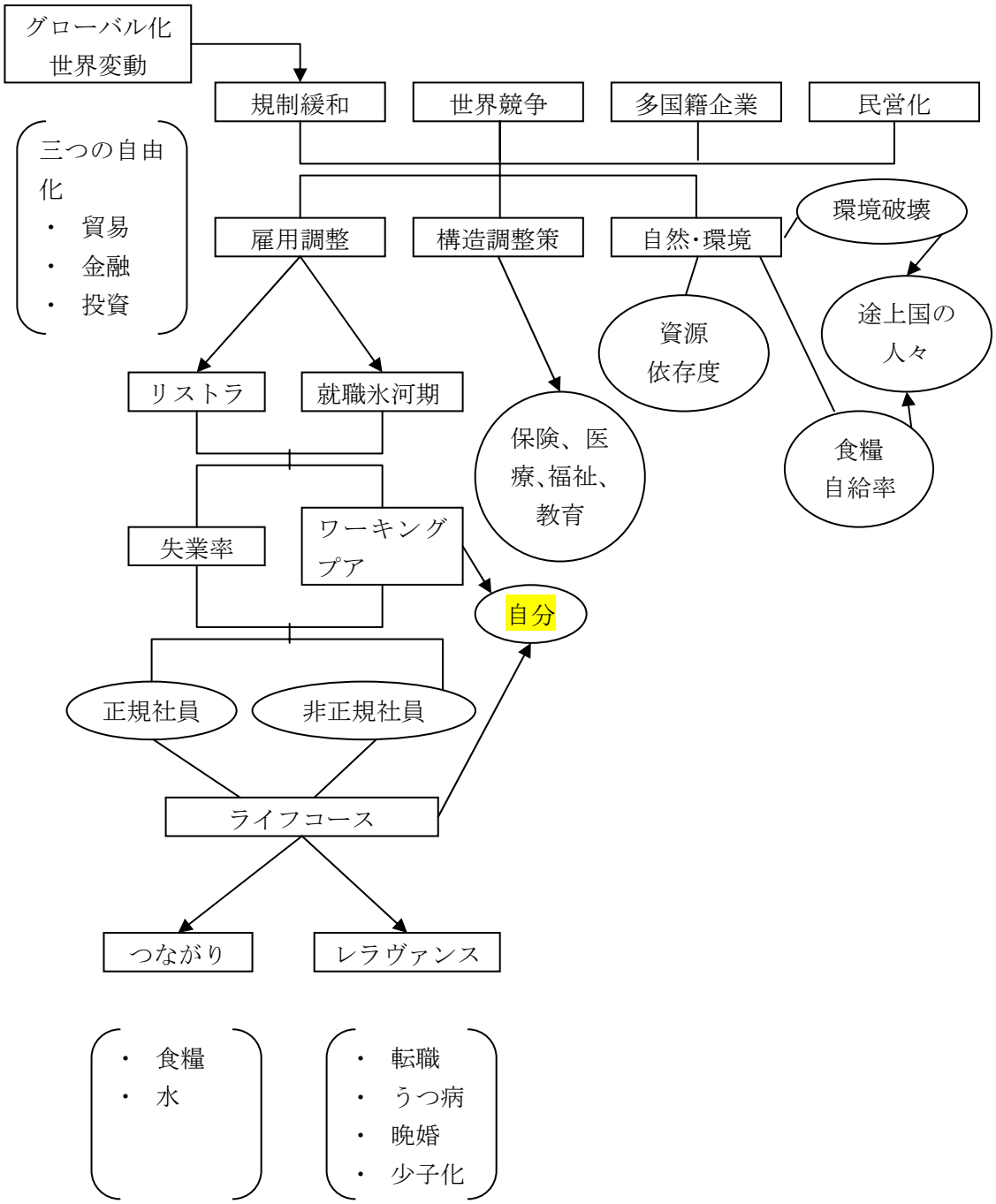
ことができなくなり、子は親から知見を受け継ぐことが難しくなった。このような状況の中、同世代の人たちは同じ境遇に面しており、より相手の立場、考え方に共鳴することができるため、同世代の人たちが共に生き方を考えることは大事になってくる。しかし、今の社会は、グローバル化が進み、国際競争力を高めるために、即戦力を育成する目的で専門に特化した教育は盛んに行われている。学生たちは目の前にある勉強、成績、就職など目の前にあることに問われ、長いスパーンで自分の生き方を考える機会は少ない。人々は社会の潮流に押されて、みんな同じ方向に向かって進んでいく。だが、生き方は多様なものがあっていいはずである。自分の考えた生き方以外、どんな生き方があるかを知ること自体は、一つの学習であり、自分の生き方の参考にもなれる。

上述したように、学習者同士のやり取りを通して、各々の生き方を考えることによって、自分と他者のことをより知り、生き方を見直す機会が得られた。競争力が要求されているいま、盲目的に目標達成を追求する人が少なくない。自分、他者、社会をより知り、見直すことが現代の社会においてとりわけ重要であろう。今回のような言語教室活動は、学習者に生き方を考える場を提供していることが可能になるため、グローバル化社会的な一役を担ったことになると考えられる。

６．四つの問いに答える活動（キーワードマップに「私」を入れる）

この例は、アジア通貨危機を自身が経験したマレーシア人日本語学習者が、雇用をグローバル化全体の中で考えることを目指す幾つかの活動をとおして、最終的にたどり着いた自分の答えとして、世界のコト、モノ、人のつながりの中に自分の位置を記入したものである。

[世界のコト、モノ、人のつながりの中の自分]



7．四つの問いに答える活動

以下のテキストは、四つの問いに対する答えとして二人の中国人日本語学習者が書いたものである。書き方にも内容にも違いがある。

＜一つ一つの問いに答えを書いた王さん＞

１．世界はどうなっているか：

グローバル化の影響で、国際競争の中で勝ち抜くため、中国でも近年、非正規雇用が急激に増えてきた。大学の拡大とともに新卒者の就職難も激しさを増している。多くの学生が自分の価値を高めるため、大学院に進学なり、海外留学なり、更に高学歴を追求する。しかし、近年、就職難は海外から帰国した留学生にも及んでいる。かつて海外留学帰りは「海亀」ともてはやされ、厚待遇で迎えられたものであったが、今ではすっかり「海草」になっていると言われている。

２．その中でどちらに向かって歩んでいくか：

帰国後、海草にされないように、今のうちにしっかりと自分の専門知識を深め、研究能力を高めていく。また国内の就職状況、特に自分と関連の大きい就職の状況を常にチェックし、万全な準備をする。

３．他の人とどんな関係を作っていくか：

国内の友達との関係を維持しつつ、日本で知り合った友達とのネットワークも大事にする。特に自分の専門の人とのネットワークを積極的に作っていく。

４．自分とは何か：

専門家になるための修行中である自分。

＜4 つの問いを一まとまりの文章にした金さん＞

自分は仕事をやめて日本への留学を決心した時は、周りから「皆が望んでいる安定した仕事を手放すのはもったいないじゃないか」という反対の声はあったものの、「目標を持って自分のやりたいことをちゃんとやって、悔いのない選択をすればいい」という応援の声もありました。確かに一度得た仕事を手放すのは勇気が要りました。なんと言ってもそれは自分の生活を保障してくれるはずのものでした。留学の道を選んだ自分は、より世界を見て、そしてより多くのことを勉強するという目標を持って、一人の修行者になりました。同世代の友達の事を見れば、ずっと安定した職場にいて高収入を得ている人もいれば、何らかの理由で転々と転職している人もいるようです。自分にとっては、安定した就職を得て、親方日の丸感覚を持っていた時期もあったが、それを自主放棄した後に、これからはどう歩んでいくかという不安がないと言えば嘘になります。でも、自分は後悔していないです。これからも後悔はしないでしょう。自分の中で頑張る目標があったからこそ、今の道を選んだわけです。仕事が安定であろうと、不安定であろうと、自分のことをまず分からなければならないと思います。自分のことを考えた上で、今度は他の人とどんなつながりを持つべきものかも考えるようになるだろうし、自分の生態環境でもある社会的な、精神的な「溜め」もよく機能してくれるでしょう。そうした中で、自分と周り、そして世界とのつながりに目を向ける余裕が出てきて、自分がどちらに向かって歩んでいくべきかということも自然に定めていけるでしょう。自分を失わない人は世界を見つめて考えることができると思います。世界がどうなっているかということを考えられる人は、今度また無意識的に自分の行動基準や人間関係、アイデンティティーの形成に注意を払うはずです。こうした生態環境の良

性循環の中で、人は心身ともに健康でいけるのではないかと思います。

参考文献

岡崎眸（2008）「ボランティア活動を通じた民主主義の活性化―外国人と日本人の双方の「自己実現」を向けて―」『日本語教育』138 号, 20-29

岡崎敏雄(2009) 「グローバル化の下で変動する世界における言語生態学の課題―持続可能性言語教育原論―」）『筑波応用言語研究』15,1-14

岡崎敏雄(2008)「持続可能性とその要としての言語教育のためのｶﾘｷｭﾗﾑ論―ｱｸﾛｽｶﾘｷｭﾗﾑのﾃﾞｻﾞｲﾝ―」『文藝言語研究』53、17,32

岡崎敏雄(2007)「持続可能性を追求する日本語教育　―その基礎としての言語教育における生態学的ｱﾌﾟﾛｰﾁ」『筑波大学地域研究』28,67-76

岡崎敏雄(2006)「言語生態学における心理・社会的両生態領域間の相互交渉的関係―『巨視的モデル』の生態学的位置づけ―」『筑波大学地域研究』26,15-26

岡崎敏雄(2006)「言語における心理。社会的両生態領域間の相互交渉的関係　―『巨視的モデル』の生態学的評価―」『筑波大学地域研究』27,15-27

岡崎敏雄(2006)「言語生態学の基底次元をなす学としての言語福祉学の展開―言語･言語話者の福祉の政策の要としての言語政策の分析―」『筑波応用言語研究』13,1-12

岡崎敏雄(2005)「言語生態学原論―言語生態学の理論的体系化―」『共生時代を生きる日本語教育』凡人社,503-554

岡崎敏雄(2005)「言語生態学に基づく言語政策研究」『筑波応用言語研究』12,1-14

岡崎敏雄･岡崎眸（1997）『日本語教育の実習―理論と実践―』アルク

穆紅（2008）「どのような母語保持努力が母語・日本語の認知面の発達を促すか―中国語を母語とする子どもの場合―」『世界の日本語教育』国際交流基金第 18 号,95-112

穆紅･楊峻（2008）**持続可能性日本語教育の活動事例―対話的問題提起学習とロールレタリング―　未公開論文**

人間開発報告書（Human Development Report, HDR）は国際連合開発計画が 1990 年から毎年発行

Baker,C. （1993） *Foundations of Bilingual Education and Bilingualism*, Multilingual Matters .（岡秀夫訳・編（1996）『バイリンガル教育と第二言語習得』大修館書店）

Bartlett,L.(1990) *Teacher development through reflective teaching* In Second Language Teacher Education. Richards,J.C.and Nunan,D.(Eds.) Cambridge University Press 215-227

Cummins,J.(1984)*Bilingualism and Special Education*:Issues in Assessment and Pedagogy, Multilingual Matters LTD.